

中国語の構造と特性

谷本 光生

1、中国の話し言葉

中国には、漢民族以外に、少数民族が五十以上もいる。漢族（中国では普通こう呼ぶので以下これを使う）は、全人口の九十五パーセント以上を占めるが、少数民族の住む地域は逆に六十パーセント以上である。

漢語に詳しい人からの又聞きであるが、漢族の話し言葉は次の八大方言に大別されるそうである。

北 京 語：黄河流域および黄河以北（昔、中原と言われた地方）

上 海 語：江蘇省・安徽省・浙江省（昔の呉の国）

湖北湖南語：湖北省・湖南省（荊州語とも言う、昔の楚の国）

四 川 語：四川省（昔の蜀の国）

閩 北 語：福建省北部（昔の越の国）

潮 州 語：福建省南部・広東省北東部（昔の南蛮の国）

白 語：広東省（昔の南蛮の国）

客 家 語：広西省・湖南省南部・広東省西部

（一番遅れて南下した中原の民の言葉）

これらの八大方言の中には、無数の地方語（土話）^{ドゥッファ}があり、百キロメートルも離れた所に住む農民はお互に通じ合わないそうであるから、どれだけの話し言葉があるのか、実際のところは分からないようである。

少数民族は、1982年で利用できる統計では、大は荘（チュアン）族の八百四十万人から、小は独龍（ドゥーロン）族の三千人まで、それぞれ別の言葉を話している。これらの少数民族語は、書き言葉：文字のない言葉がほとんどである。

漢族の言葉：漢語には、漢字という文字があるが、読み方は、八大方言ごとにかなりというか大いに異なる。同じ漢族の中でも、昔の戦国時代（BC403～BC221）の国が違う人との会話には、解放前は通訳を使うのが普通であったし、異民族の間の会話には、今でも通訳なしには成り立たない。話し言葉によるコミュニケーションの面で中国を見た場合、そこでしかコミュニケーションが成立しない無数の集団が存在しているわけであるから、日本の状況とは比較し得ないほど、意思や情報の疎通の極めて悪い社会である。（百キロメートルという距離は、1982年現在の中国の行政単位「県」に相当する距離である。県級の行政単位の数は、2136である。）

例えば、「香港」は、広東語読みで「ホンコン」であり、北京語読みでは「シャンカン」である。「日本」は、上海語では「セポン」、広東語読みでは「ハポン」などと読むが、北京語では「ルーベン」である。因みに、英語のジャパン（JAPAN）は広東語「ハポン」が源流であり、「ハポン」をポルトガル風に綴ったスペルが英語風に訛ったものである。また、上海の読み「シャンハイ」は普通話（プートンファ）で、上海語では「ソンヘエ」と言うらしい。

余談になるが、「セポン（上海語）」「ハポン（白語：広東省）」は同じ語族に属するといえるだろうが、「ルーベン」とはまったく異質な言語系統に属するといえるだろう。漢族と総称しているとはいえ、

揚子江を境にして南北で、全く異なる民族が並存しているのが、中国の実情である。

話し言葉の面から言えば、中国は、いまだかつて統一されたことのない国であって、中国史に度々現われる秦・漢・隋・唐・宋・元・明・清などの統一王朝も、決して日本的意味での統一政権ではない。日本的な言葉のまとまりから言えば、八大方言という言葉で象徴されるように、八つの漢語系民族（漢字を使っているという程度の意味）と、その周辺に五十四の少数民族が存在している国であり、六十二の多民族・他言語集団を中央集権官僚統治機構で治めていた政権が、これらの統一政権であったし、今の共産党政権も同じである。

かつての中国は、決して日本的意味での国家ではない。そして、この体質は、今でも続いている。中国という国は、話し言葉よりも、むしろ、書き言葉によるコミュニケーション、すなはち、「筆談」でもって対話をしてきた国と言えるであろう。

しかし、各集団のトップレベルの人々、いわゆる士大夫階級の人達（科挙及第者など）は、その時々政権の言葉を話し得て、「情報」を独占し、その結果として「知識」「富」「権力」を独占し続け、一般の百姓（中国語、庶民といった意味）は、原始に近いままの生活をしていて、といった風景が実情であったと思われる。

士大夫（官僚群）たちにとっては、時の政権語を話せ、時の政権流に漢字が読めることが、必要不可欠なことであったし、それができることが権力の座に着くための第一条件であり、権力の座を守るための最大の武器でもあった。

2、標準語：話し言葉の統一へ

筆談の国から会話の成立する国へ、情報の独占がもたらす弊害を取り除くために、解放後の中国政府は、標準語（中国では、普通話（プートンファ）と言う）を制定し、初級学校を充実させ、文盲の一掃に乗り出した。ローマ字を用いた発音記号（併音字母、ピンインツォモ）の併用、文字の簡略化等による学習のしやすさを計り、普通話の普及活動を精力的に行ってきた。

話し言葉の標準語として、清王朝の官僚達が使っていた、いわゆる「北京官話（ペイチンカンファ）」（マンダリン）を採用した。採用の理由は、「響きが美しい」ということも大きな理由であったと思われるが、恐らくは、実際の意味として、各地方の士大夫達が話し得ていたという事と、この言葉以外に中国全土に通用し得る言葉がなかったという事が重要な理由であったのであろう。（私見ではあるが、革命で没落した知識階級（即ちかつての権力層）の失業対策もあったのかもしれない。）

「北京官話」は、官僚達が密室で使った会話用言語であるから、他の方言に比べ「響きが美しい」とはいえるが、屋外で喋ったり労働の合図に使ったりするような実用性には乏しい言語ではあるが、中国を統一した、一つのコミュニケーションの成り立つ社会にする事は、革命後の政府にとって、焼眉の急であり、より実用性の高い言葉を改めて選定して、普及させるというような悠長なことはしてはおれなかったのであろう。

言葉は、それを使う人の生活水準の向上、技術の向上、経済活動の活発化と共に、語彙を殖やし、普及が進むにつれて実用性を富ましなが、発展・変化していくべきものであるが、この標準語：普通話には、実用性の乏しさという元々の生まれの悪さ以外に、漢字のみによる表記方法という制約条件があるということを考えるならば、社会の変化に耐えられるほどの柔軟性・拡張性を、どの程度にまで保有しているのだろうか。

実際の労働現場で、使用されている言葉は方言である。この標準語が、方言に置き代わり得るか否

か、かなり難しいことのように感じるのであるが。

3、表記方法

中国語の表記方法は、漢字であり漢字のみである。

漢字の総数は、五万とも十万ともいわれているほど大量のものであるが、常時頻繁に使われているのは、六千語前後であろう。例えば、大学書林の中国語小辞典の見出し語の数は、六千九十字である。

これらの漢字は、字画が多く複雑なもので、記憶・使用には不便なものであった。この事は、士大夫階級が文字を独占する為に都合が良かったし、又、この為もあって、漢字の簡略化、即ち、知識の大衆化を拒んでいたものとも考えられる。

革命後の漢字の簡略化は、大幅なもので、例えば、「業→[・]」「厰→[・]」「瞭→了」「義→[・]」等々で（[・]は略字である、ワードで扱わない字であるため敢えて新字を用いない、以下同じ）、日本人から見れば、少々やりすぎではないかと思われる程である。

簡略化の方法は、草書体の導入と表音化である。「糸→[・]」、「言→[・]」、「見→[・]」、「金→[・]」等々の草書体化。「道→辺」等々の表音化。（道の発音はdao, 刀の発音はdao, 首の発音はshou）

日本・中国・韓国の間で、漢字字体の統一ができれば良いと思われるのであるが、日本には「ひらがな」「カタカナ」があり、韓国には「ハングル」がある点、中国とはかなり事情が異なる。各国ごとに、漢字字体が異なっていくのも仕方がないことであろう。次の世代は、筆談も通じなくなるのも仕方がないことなのであろうか。（実際問題として、日中間では同じ漢字でも意味するところがかなり異なることが多いので、実質的には筆談は不可能に近いが。）

漢字は、一つの記号が「意味」と「発音」の二つの機能を持った非常に優れた記号体系である。全ての文字は、象形文字から発達したものである。漢字は、この文字の基本ともいべき象形文字が、その基本を失わず、洗練され・精緻化された記号の論理的組み合わせであり、字体そのものに、芸術性と論理的構造とを合せ持った記号体系でもある。

漢字は、パターン認識そのもので、漢字を知っていれば、「考古学」と書けば何をする学問であるか中学生でも分かる。英語「Archaeology」では、よほどの知識人でないかぎりその意味は分からない。

漢字は、又、その字画の多さから、正確に書くことを要求される、その字体の持つ芸術性から美しく書こうとする要求が生まれる。

漢字を使う東アジアの諸民族（日本・朝鮮・中国と昔のベトナム）は、手先が器用である。手先が器用ということは、頭脳が優秀ということと密接な関係がある。勿論、箸の併用も、与かって功あるであろうが、東アジアの諸民族が、世界的に見て、頭脳優秀といわれている原因の一つは、漢字の使用によることは間違いないことであろう。

「漢字の発明」は、中国文明が世界に誇れる成果の中で最大のものであり、人類文明全体にとっても巨大な財産である。（但し、現在漢民族と自称している人々と、漢字の発明者とはほとんど関係ないと思われる。漢字の発明は、夏・殷・周のころであり、その時代の主要民族は魏・呉・蜀の三国時代までに滅亡したと見做すほうが自然である。紀元前後の前漢・後漢という王朝の支配階層も、中原の民ではない。）

文明の成果は、各民族共通の財産であり、出来るだけ多くの人が利用すべきものである、と私は考える。例えば、日本の工業製品（TVやVTR）が、世界中で使われている例などそのよい例である。表

音系の文字を使用している民族も、漢字の持つすぐれた「有用性」を大いに利用すべきであろう。

「漢字・仮名混じり文」に慣れている、我々日本人にとって、漢字だけで記されている「中国語」を読むことは非常に疲れる。

これは、一字一字を正確に読まなければ、意味が理解できないということが原因であるが、これ以外にも、外来語の音訳漢字（地名・人名など）の意味が分かりにくいということが、大きな原因となっている。

一字一字を正確に読まなければ、意味が理解できないという特徴は、英語・フランス語などでも同じ事である。中国語・英語などは、「速読術」といった類いの方法は、適用しにくい表記方法であると言って良い。これらの言葉は、もう少し、他国文明の成果を取り入れる必要があるように思われる。

例えば、中国語に、ローマ字を導入すれば、外来語の音訳漢字などという奇妙なものとはなくなるはずである。（併音字母は、ローマ字による漢字の発音記号であり、ほとんどの中国人は、ローマ字を知っているのであるから、簡単なことのように思われるのであるが。）アルファベット二十六文字を取り入れることなど、漢字常用数六千字を考えるとどうも言うこと無いように思われるのであるが。

（実際には、算用数字1・2・3などは標記方法に取り入れられているのであるから、アルファベット26文字の導入はそれほど困難なこととは思えないのだが。）

プライドの高い民族は、そのプライドの重みと格闘し続ける運命にあるのかもしれない。しかし、文明というものは、本来、便利さのためにあったものであるはずだが。

4、発音方法

現在の日本の漢字の読み方、即ち、「音読」は、昔の呉の国：今の南京・蘇州・上海等のある揚子江下流地域の人々の昔流の読み方で、現在の中国の標準語：普通話の読み方と全く異なるし、地域的にオーバーラップする上海語とも異なる。

標準語には、四百二十七の音素（ここでいう音素は、アルファベットに相当するものではなく、言語学で言う音節にあたる）がある。

一つの漢字は、普通、一種類の音節（一種類の読み方）に対応しているが、稀には、二種類の音節に対応している字もある。二種類の読み方を持つ漢字は、少数で、「行：hang, xing」「約：yao, yue」などである。

常用語を六千とすると、同じ読み方をする漢字は、平均十四ケ（ $6000/427 \approx 14$ ）あり、多いものでは、一つの読みで三十ケを越える漢字が相当する。

漢字は、同音異義語の集まりと言って良いほど、同音異義の多い文字体系で、この不便さを無くするために、高低のアクセント：四声を併用している。

四声は、英語などのような強弱によるアクセントではなく、高低によるアクセントで、第一声を上平、第二声を下平、第三声を上声、第四声を去声と言い、それぞれ、“一”、“／”、“V”、“\”の記号で現す。（この記号も、正確なところは辞書などを参照してください。）

四声を考慮すれば、中国語は、約千七百ケ（ $427 \times 4 \approx 1700$ ）の音素・音節で構成されている言語であると言っても良い。

日本語が約百ケの音素・音節で構成されている事と比べれば、中国語は、音の数が非常に多い言葉と言える。（ただし、英語の音節は、約三千とも五千言われていることと比べれば、少ないとは言えるが、英語の単語は、一音素だけのものから十音素程度のものまでであるのに対し、中国語の単語は、

一音節または二音節のみであるから、同列には比較できない。）

中国語は、「同音異義語が極めて多いという点では、意味面におけるリダダンシイの小さい言葉」「音素が多いという点では、発音面におけるリダダンシイも小さい言葉」即ち、「意味面・発音面両方の点でリダダンシイの少ない言葉」と、言える。

日本語は、中国語と比べた場合、「発音面におけるリダダンシイは極めて大きく」、「意味面においては、漢語を借用している所では、リダダンシイは小さいが、それ以外の所では、リダダンシイの大きい言葉」と言える。（日本語の発音面におけるリダダンシイの大きさは、世界の言語の中でも、最大のものであると思われる。）

ついでに言えば、英語は、「発音面のリダダンシイは、極めて乏しい」が、「意味面におけるリダダンシイは、かなり大きい」と言い得よう。（英語の発音面のリダダンシイの乏しさが、日本人をして英語を苦手に行っている原因の最大の理由である。）

（注）リダダンシイ（Redundancy）とは、情報処理用語で、「冗長度（じょうちょうど）」と訳し、情報の伝わり易さや、途中での誤りの少なさをいう言葉。「リダダンシイが大きい」とは、「伝わりやすい・分かりやすい」ということを意味し、「リダダンシイが小さい」とは、「伝わりにくい・分かりにくい」ことを意味している。

（余談）アメリカ人のジェスチャーの派手さを、アメリカ人の陽気さの証拠であるという風に論じる人が多いが、私には、アメリカ人の陽気さの証拠と断定するのは、どうかなと思っている。

英語は、音節の数が非常に多く、発音面におけるリダダンシイが極端に少ない言葉である（言い換えれば、**ぼろな言葉**）。この為、実際の会話では、話し相手の癖を熟知し、余程注意して聞き取らなければ、言った言葉が相手に全て通じることは稀な言語ではないかと思われる。それ故、オーバーなジェスチャーでもって補完しないかぎり、相手に意を十分に伝え得ない言葉ではなかろうかと、私は思うのだが。如何なものであろうか。

我が仮説が正しいとするならば、ジェスチャーの派手さは、言葉の「ボロさ加減の大きさ」を示していることになるのだが。

5、構文

人間は、言葉によって思考する。言葉なしには、人間の思考は成り立たない。言葉は、それを使用する人の思考方法を規定する。人間の思考順序は、使う言葉の語順と同じである。それ故、「語順は、文化・文明を知る上で最も重要な要素である」と、私は思っている。

文法の基本は、語順法則のことであるから、文法を知ること、その言葉を話す人々の基本的思考順序・思考方法を知ることでもある。

（1）日本語の構文

日本語の語順、少なくとも、正しい日本語の語順は、必ず、次の順序になっている。

（主語）＋修飾語A＋修飾語B・・・・・・・・・・・・・・・・・・＋修飾語X＋修飾語Y＋修飾語Z＋動詞＋肯定語（又は）否定語

又は、

修飾語A＋修飾語B・・・・・・・・・・・・・・・・・・修飾語X＋修飾語Y＋修飾語Z＋（主語）＋動詞＋肯定語（又は）否定語

そして、「美しい娘」「道を走っていた犬」「何月何日どこそこで会った君の友達」という風に、名

詞を修飾する言葉は必ず名詞の前に来る。

動詞を修飾する言葉についても、同様に、

「何時：When」

「何処で：Where」

「何の為に：Why」

「誰が：Who」

「何を：What」

「どの様に：How」

する（または）しない。

という語順にかならずなっている。言い換えれば、5W-1Hが、ほぼこの順序で述べられる言葉が、日本語なのである。もちろん、5W-1Hが欠ける場合もあるが、欠けたとしても、残りの順序は同じである。

日本語とは、「する」「しない」ないしは、「私はする」「私はしない」を修飾するための言葉であると言える。

修飾語A＋修飾語B＋・・・修飾語X＋修飾語Y＋修飾語Z

は、最初にあるほど、大きな概念・意味に対応し、終りにあるほど、小さな・具体的意味に対応する。即ち、

修飾語Aは；何時、：When（たまに、Where）に対応し、

修飾語Bは；何処で、：Where（たまに、When）に対応し、

事象の時間軸と座標軸をまず最初に設定する。

修飾語Zは；どの様に：Howに対応し、「はやく」とか「ゆっくり」とかに対応し、事象の最も具体的な説明となっている。

言い換えれば、日本語の修飾語の順序は、

修飾語A ≧ 修飾語B ≧ …… ≧ 修飾語X ≧ 修飾語Y ≧ 修飾語Z

の順序の概念範囲にかならずなっている。

また、副詞は；語尾に“く”を、形容詞は；語尾に“い”を、動詞は；語尾に“る”“する”をつければ、簡単に造語できる。というように、極めて整然とした規則性と柔軟な拡張性とを合せ持っている。例えば、

「Nowく」、「Nowい」、「Nowる」、「上手く」、「上手い」、「上手る」等の如くに。

主格助詞；「は」と「が」による概念区分の使い分け、文の終りは、必ず、「する」「しない」、「します」「しません」、「である」、「でない」等々のように、一目瞭然としていて分りやすく、かつ、韻を踏んでいる。

このように、日本語は、「語順の規則性と論理性」「単語の規則性と拡張性」「文末の規則性と明瞭性」等々、世界の他の言語と比較した場合、稀に見るほどに、規則性と共に、非常に卓越した論理構造を持った言語なのである。

この事を言い換えれば、一つの行為・文章を言う場合、その行為の行われる場・文章の相手に与える影響などを完全に把握していないと、話せないのである。

事前に、修飾語をすべて語っているわけであるから、「する」を「しない」に言い換えたり、「しない」を「する」に言い換えたりすることの出来ない、大変に厳格な構造を持った言葉なのである。

巷間よくいわれている説に、「日本語は非論理的である」「日本語はアイマイである」といった説が多いが、これらの説は、全て、表層のみを言っているのにすぎないのである。日本語は、本質においては、極めて厳格で論理的に逃げ場のない言葉なのである。

この日本語の構造的特徴は、日本人の頭脳形成や思考方法に、極めて大きな影響を与えている。

巷間よくいわれているこれらの表層の説は、日本語の構造的特徴がもたらした結果を言っているのであって、原因を言っているのではない。日本語の特徴の一つである擬態語・擬音語・曖昧語は、この原因によって、出てきたものである。

場の状況の完全なる把握を必要とする事は、それらの語が持つ語感から、状況を想定させ、本来は意味のない「わんわん」「にゃんにゃん」語に、意味を感じさせているのであるし、規則性・論理性から逃れるために、曖昧語「まあまあ」とか「ちょぼちょぼです」とかを成り立たせていると考えるべきなのである。

そして、日本語のもう一つの特徴である「尊敬語」「謙譲語」などをも成り立たせているのである。

相手に対する心理的影響の事前把握の必要性が、日本人をして「思いやり」を重視させ、その結果として、「喧嘩下手」にさせているのである。

(2) 中国語の構文

中国語の構文は、あまり良く分からない。中国語に文法と言えるものがあるのかないのか判らないが、(実際問題として、どこの本屋でも、中国語文法書なんて題名の本を見たことはないのだが)

「主語＋(否定または肯定語)＋動詞＋対象語」

という基本構文は、英語と同じであるが、

修飾語A＋修飾語B＋・・・・・・＋修飾語X＋修飾語Y＋修飾語Z

の間には、あまり規則性はないようで、修飾語の位置関係もはっきりしていない。修飾語の並べ方で、意味が変わるといったような構文のようである。又、英語の過去形・過去完了形に相当するような、動詞の変化もない。

この点、英語は、わりとはっきりしており、修飾語の並べ方は、日本語と大体逆で、

修飾語Z＋修飾語Y＋・・・・・・＋修飾語C＋修飾語B＋修飾語A

となっている。(年月日の記述方法を思い出せば了解できるはず。)

中国語は、基本的構造は、英語と同じSVO語順であるが、修飾語の構造は英語的な所もあり、日本語的な所もある言葉という風に考えて良いようである。(SVOとは、言語の三大要素、主語：S:Subject、述語：V:Verb、目的語：O:Objectをいう。日本語は、SOV語順。)

中国人の思考方法は、語順から見て、欧米人と基本的には同じであると見做して良いが、動詞の語尾変化がない点、過去・現在・未来については、話されている言葉の状況を判断して、理解しなければならない。といった風なあいまいさがある。

例えば、

「我 将 打 擊 ×××」(I will strike XXX)

「我 愛 你」(I love you)

を例にして考えると、

相手が誰であれ、まず、「殴りたい」と考えて、それから、「殴る相手を」考えるのであろうか。相手が誰であれ、まず、「愛したい」と考えて、やおら、「愛する相手」を考えるのであろうか。

語順だけから、彼等の思考方法を純粋に考えるならば、上に記したようになっているはずである。

動作が対象を決める語順であって、対象によって動作を決めている語順では決していない。

この辺の所は、大脳生理学や心理学にとっては、重要な研究テーマであろう。興味深いところである、教示願いたいものである。

この様な思考方法が、人間心理の本来のものとは、私には考えられない。語順が思考方法に対応していると考えられる以上、彼等のメンタリティと我らのメンタリティは、恐ろしくかけはなれたものであろう。決して、合い容れ得るメンタリティ：心情過程を持った人々ではない。

「我ら、真人間（まにんげん）」、「彼等、馬の骨」と言い合ったり、お互い「人間モドキ」と見做し合うことになるのも無理はないことである。

中国人と談判していても、彼等が頭の中で考えていることを口にする時、わざわざ、組み替えて発言しているようでもなく、こちらも、中国語を喋ろうとしても、日本語語順の並びでしか中国語が出てこないことを考えるならば、人は喋っている言葉の語順どおりに思考していると考えた事は、それほど間違った考え方ではないであろう。

日本語・中国語の特徴を言い直せば、次のようにも表現できる。

★日本語：全思考空間から、論点に向かって極めて論理的・規則的に収斂していく言葉。

★中国語：論点から、全思考空間に向かって極めて不規則かつ非論理的に発散していく言葉。

★英語：論点から、全思考空間に向かって、わりと論理的・規則的に発散していく言葉。

言葉そのものが内蔵する「非論理性」「不規則性」「状況設定のなさ」が、彼等をして、儒教・道教といった「巨大体系」を整えさせ、場・状況の整理をなさしめたのであるし、「論理」や「修辞」をかくまで精緻に展開させたのであろうか？

彼等の言語は、「砂漠に一人いる時には成り立つ言語かもしれないが、社会生活を営む上においては極めて不向きな言語である。」と見做して良いようである。

日本と中国は、「同文同種」などと良く言われているが、言葉ひとつ取り上げただけでも、これだけの差が（思考順序が、逆であるという差）があり、決して「同文」ではない。ただ、単に、漢字を共有しているにすぎないのである。（漢字の共有といっても、二千年以上も前の話であって、今ではかなり意味が異なる漢字もあり、かつ、日本の敗戦後の漢字の簡略化、中国の解放後の漢字の簡略化の相違により、字体もかなり異なっている。）

また、「同種」のほうも、瀬戸内海沿岸や北九州地方の人々の中には、或いは、呉・越の人達と同種と言える人が居るかもしれないが、日本人の大半を占める縄文系の人々とは、別種と言って良い。

（呉：現在の上海・南京のある揚子江下流地帯、越：現在の福建省）

日・中の関係を強いて定義付けるならば、「**非文似種**」といったところであろう。

6、言葉の発展性

日本語が、漢字を取り入れ、「訓（くん）読み」を発明し完全に日本語の表記記号とした例や、「ひらがな」「カタカナ」を創案し、「漢字・仮名混じり文」による、日本語の表記方式を完成した例で判るように、言葉は常に変化し・発展するものである。

（余談：韓国も、日本の「漢字・仮名混じり文」によく似た「漢字・ハングル混じり文」をもっているが、韓国には、漢字の「訓読み」に相当するものがないので、かなり日本の事情とは異なる。いまだ漢字は借り物といった感じが強いのか、それとも、「音読み」漢字を自己のものに見做すほどに、変質しているのか？教示を請いたい。それにしても朝鮮半島の人たちの気が知れん、ボキャブラリィ

(語彙) というものは、基本的な言葉を除いてほとんどが借り物(借用語)のほずで、これはどこの言語でも同じはず。朝鮮語もほとんどが漢語ないしは日本語からの借用語であり、その標記方法の基本は漢字のほずで、同音異義語の集合体といってよいはずだが、どういふわけかハングルだけで標記しようとしている。どうやって意思疎通を図ろうとしているのであろうか?)

戦後、主として、アメリカから言葉を取り入れた例で分かるように、言葉は、常に、新しい物・事に対応した語(Word)を作る能力か吸収する能力を必要とする。

明治期の日本は、主として、漢字によって新語を造成し、欧米の物・事を吸収し、理解してきた。戦後は、主として英語をそのまま日本語化することにより、語彙を殖やしてきた。

中国語においては、文字は漢字のみであるから、新語の造成は、当然のことながら、漢字だけを用いる。

外国の物・事を取り入れる方法として、「音訳」と「意識」とがある。「音・意両訳」の例も多少あるが(Coca Cola → 可口可樂、Radar → 雷達、等)、一般には「意識」が主流である。

解放前の中国は、主に日本で造られた「和製漢語」を導入してきた。「経済」「物理」「科学」「化学」「共和」「人民」等の新しい概念用語は、全て「和製漢語」である。

解放後は、自らの手で造語しつつある。(造語するのは結構なことであるが、わざわざ、日本語と異なる漢字を当てて造語しようとする傾向にあり、筆談の妨げになると同時に、通訳泣かせでもある。実用的に意味のない変な反日感情は早く捨ててもらいたいものである。)

科学・技術・工業の発展と共に、新物質・新装置・新技法・新概念の発達は、目覚ましいものがあり、システム化・総合化と共に、概念の微細化・精緻化は避けられない。

しかしながら、漢字で常用されるものは六千字前後であり、それらの二ケないしは三ケの組み合わせで、一つの単語を構成し、それでもって意味の通じる単語にしなければならない。この制約があるため、一つの単語に似た意味・近接した概念を、受け持たさなければならなくなる。

例えば、英語の「Plan」「Design」に対応する日本語は、それぞれ、「計画」「設計」であるが、中国語では、両方とも「設計」である。

又、中国語の規格という言葉は、非常に包括的な言葉で、日本語の「公的規格」「準公的規格」、メーカーの「製造標準」「検査基準」「設計標準」、機械の「銘板記載事項」、購入者の「購入仕様書記載事項」、供給者の「見積仕様書記載事項」など、設備の性格を示す全ての言葉を含んでいる。それ故、中国の技術者は、設備を外国から購入しようとしても、購入仕様書に何を書いて良いのか分からなくて困っている、実際中国人が書いた購入仕様書なんてものは見たことがない。

(余談、日本語の「仕様」という言葉は面白い言葉で、一般用語となっているが、これは、「どうしよう」「こうしよう」の「しよう」に「仕様」の漢字を当てた和製漢字で、中国人には意味不明である。)

これから判るとおり、中国語は、概念とか意味の識別の面で制約のある言葉であって、現代社会に適合しえるかどうか疑わしい言葉と言って良い。

この言葉で育ち教育され、思考している人が、中国人である。中国人と何等かの取決めを行う場合には、概念用語の定義化(望ましくは、英語等を用いて)を、まずしておく必要がある。

7、言語の計算機処理

今後、電子計算機(中国語では、電腦という:参考)による、言語処理の必要性は、益々その度合いを深めていくであろう。日中:両言語を比較した場合、計算機による処理のし易さ・し難さには、

大変な差が出て来るものと予想される。

(1) 音声認識と発声機能

音素・音節の数によって、音声の認識と発声の難易度は、支配される。日本語；約百ヶに対し、中国語；四百二十七ヶ、その上、高低のアクセント（四声）によって意味が変わるのであるから、約千七百ヶと大変な数になる。

優劣は明らかであろう。（この辺の事は、計算機による言語処理が進んだ現在、かなり判っているはずだと思われるが、どなたか教示を請う。）

(2) 意味の理解

日本語：構文の規則性と論理性、助詞の利用による各語の役割分担の明瞭性、文末の明確さ等々、計算機に理解させるには最も適した言語の一つであろう。同音異義語も、簡単な対話システムにより容易に解決するであろう。

中国語：構文の複雑さ・不規則性、同音異義語の集まりといった語彙、四声による意味の差、語尾の不明確さ等々、計算機に理解させるには、かなりの困難さを伴う言語のように見受けられる。

日中：両国語間の自動翻訳は、日本語・英語間のそれよりも、完成は遅れるであろう。

（余談：中国や欧米の詩は「韻」を踏むことを重要視する。日本の「詩」は、全然、「韻」を踏むことを重要視しない。

この理由は、「日本語の文章が普通に使っても韻を踏んでいる」のに対し、「中国語や欧米語は韻を踏んでいない。」所にあると私は思っている。

太古の昔、中国語や欧米語も、日本語と同じく普通の文章のままで韻を踏んでいた。即ち、中国語や欧米語も、大昔は、日本語的語順であったことに対する、郷愁ないしは意識下の念いが、中国人や欧米人をして、「韻」を重んじらせているのではなかろうか、と私は考えているのだが。如何なものであろうか。この事については、また、別の機会に譲ろう。）

8、人称代名詞

日本語には、やたらと人称代名詞が多い。

一人称は、英語では“ I ”、中国語では“我”；一人称複数は、“We”と“我們”；二人称は、英語では“ You ”、中国語では“你”；尊称として、“Thou”“您”；三人称は、英語では“ he ”“ she ”“ it ”“ this ”“ that ”“ they ”、中国語では“他”“她”“它”“他們”“她們”“它們”などである。（但し、“他”以外はすべて解放後の造語）

日本語と比べると、英語・中国語の人称代名詞の数は非常に少ない。むしろ、日本語の人称代名詞の数は異常に多いと言い得る。

英語で、

「I want you to do something.」

と言った場合、これを日本語に翻訳すると、

教科書流にすれば、「私は、あなたに、〇〇することを望みます。」等であり、

父と息子の間の会話では、「お父さんは、おまえが、〇〇することを望むよ」等であり、母と娘との間では、「お母さんは、あなたが、〇〇するようにして欲しい」等であり、部下が部長に言う場合、「私は、部長が、〇〇される事を望みます」等であろう。

この例では、

I は、「私」「お父さん」「お母さん」に、対応し、

Youは、「あなた」「おまえ」「部長」に対応する。

一般的に言えば、“I”“我”や“You”“你”に対応する日本語は、無数にあり、対人関係・身分・地位などを表す言葉は、全て、“I”“我”や“You”“你”たりうる。

日本語のように、構文明解・発音単純な言語が、世の中の人から、難しい言語の一つに挙げられている理由の一つは、この人称代名詞の多さであろう。その他の理由は、「多様な人称代名詞に対応して語尾をどのように結ぶか」という所や、「漢字仮名混じり文」と「漢字の訓読み・音読みと二種類以上の読み方」（特に、訓読）という点にあるのであろう。（この事は、中国人通訳が私にいつも言っていたことである。）

日本語を語るとき、相手と自分との相対関係を即座に判断し、どういう人称代名詞を用いるか、どういう風に（尊敬か謙譲か丁寧か）語尾を結ぶべきかを、決めなければならない。

日本語を難しくしているこれらの特徴は、これ又、日本語の持つ「全思考空間から、論点への収斂性」という思考順序によるものなのである。そして、日本語ないしは日本語的語順の言葉を話す人々しか、この様な思考方法はし得ないのである。

日本語で育った人と、英語・中国語的な言葉で育った人達とのメンタリティの差、ひいては、文化的差・社会人類学的差も、この辺に起因しているのであろう。

親と子との間の会話においてさえ、“I”と“You”“や”我”と”你”だけで済ますことの出来る社会の人間関係とは、何と単純なものであろうか。

単なる個人としての自分、単なる個人としての相手しか考えなくて良い人達の心情・メンタリティとは、どの様なものであろうか。私にはわからない。

9、余談：中華人民共和国という国名

中華人民共和国という国名は、変な国名である。

今の中国のことを、昔は「支那（しな）」と呼んでいた。これは、昭和15年生まれ私でも記憶にあることだし、中国人自身も、自分のことを支那人と呼んでいた。（魯迅や孫文は自分のことを支那人と書いている。）国を呼ぶときは、漢・唐・宋・元・明・清と呼んでいた。

いつから、中国という名前が国号として使われ出したのか、「中華民国」か「中華人民共和国」という国名の略称としてであろうか、良くわからない。

「中華」は、訳しにくい言葉であるが、「世界の中心にいて、華やいでいる。」といった意味なのであろう。周囲を、東夷（とうい）・南蛮（なんばん）・西戎（せいじゅう）・北狄（ほくてき）と低く見下し、自分だけをひとり高見（たかみ）において自称して言う言葉であって、「中国」にも本来そういう意味がある。

自己肥大症に取り付かれた国民（逆に言えば、コンプレックスの塊のような国民）は、自分の国の名前に、この様な形容詞を付けたがるようである。この論文のどこかでいずれ説明することになると思うが、支那の歴史のどこに華やぎがあるというのだろうか？

人口飽和→天候のちょっとした不順→流民の発生→治乱興亡・大殺戮→人口減→安定→新王朝の出現→人口飽和、この繰り返しでしかない支那の歴史・文化のどこに華やぎがあるというのであろうか？全く困った隣人がいる。

「人民」は、“People”の訳語として、日本人が作り出した言葉である。「共和国」も、やはり、“Republics”の訳語として、周時代初期の王族合議制を意味した言葉を、換骨奪胎させて、日本人が

新生させた言葉である。

最初の「中華」のみ中国語、残りの「人民」「共和国」は日本語という奇妙さは、誇り高き中華の民にとってあって良いことなのであろうか。

勿論、言葉は、どの国の言葉であれ、文明の範疇に属するものであり、少なくとも、文字に書かれているものは、万国共通の財産であり、世界中の誰でも利用できるものである。

日本人は、この文明の特性を、十二分に活用して、自己の文化を豊かにしてきたのであるし、今後もし続けるのであるから、中国人にも同じ権利がある訳であり、文句を言う筋合いのものでは全然無いのだが。「中華」と付ける以上、もう少し後ろに付ける言葉を考えたら、例えば、「中華民国」、これはすべて中国語、すっきりしている。

漢字の発生はすべて中国と考えるなら、納得もいくが、しかし、「けじめがない」というか「おおらか」というか、釈然としない国名ではある。

敷島（しきしま）の、大和（やまと）の国は、言霊の幸（さき）はう国ぞ、ま福（さき）くありこそ。

（万葉集：柿本人麻呂）

垣山（かきやま）に たなびく雲の霞みあり 我に言葉あり 何か嘆かむ

（昭和21年初春：土屋文明）

余談 このあいだテレビを見ていると、デジタルという言葉が中国語では「数字」と訳しているらしい。「数字」は日本語と同じく、1・2・3など数を表す文字の事であるが、この字句に「デジタル」という意味を当てはめて使っているという事は驚きであった。（2,005.12.15記す）ことほどさように、中国語の字句にはいろんな意味が込められているので、判読が難しい。